

令和元年6月25日現在

機関番号：42705

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2016～2017

課題番号：16H07222

研究課題名(和文)「見守る」しつけと児童期の子どもの他者理解，感情制御の発達

研究課題名(英文) The relationship between "Mimamoru" parenting and the development of children's abilities of understanding others and emotion regulation

研究代表者

風間 みどり (Kazama, Midori)

小田原短期大学・保育学科・准教授(移行)

研究者番号：40780812

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：子どもの感情制御の発達を検討するために、幼児期と同じチャレンジ課題を11歳で実施し、コルチゾール反応と行動を縦断的に分析した。4歳ではコルチゾール反応は示されたが、11歳では示されず行動の統制もできるようになった。幼児期でのしつけ、チャレンジ課題での子どものコルチゾール反応、気質と児童期の問題行動との関連について縦断的検討を行った。幼児期のコルチゾール反応が大きいほど、11歳の攻撃行動の得点が高く、内在化問題行動の得点も高いことが示された。幼児期の養育者のネガティブなしつけが高いほど、11歳の攻撃行動が高いことが示された。一方見守るしつけは、11歳の問題行動とは関連が示されなかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本の子育て、教育で広くなされてきた見守るしつけを含めた養育者の養育態度が、子どもの発達にどのような意味をもつのかを検討するために、幼児期から児童期まで、子どもの気質、認知能力、ストレス場面での行動やコルチゾール反応、児童期の問題行動との関連を縦断的に分析した。これまで見守るしつけがその後の子どもの発達にどのような影響を及ぼすのかについて、子どもの気質や生理的反応を含めた研究はあまりない。養育環境は感情制御の内分泌系ホルモンとも関連することから、生理指標を含めたこの研究の成果は、子どもの心身の健康的発達を促す日本の子育て方法、教育方法を構築するための基礎データを蓄積するという点で意義がある。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to identify how children achieve their appropriate emotion regulation from 4-years-old to 11-years-old and its relationship among children's psychological factors, physiological reactivity and parenting by longitudinal study. Result showed that children's cortisol responses in 11 years old against stressful Computer task had become much smaller than cortisol responses in 4 years old against the same task. Result also showed that children had higher scores of Internalizing and Aggressive behavior of CBCL in the cases that children in 4 years old had larger cortisol responses in Computer task. Moreover, the scores of children's aggressive behavior in 11 years old were higher in the cases that the scores of negative parenting in 4 years old were higher. However, Mimamoru parenting was not related with any of children's behavior problems in 11 years old.

研究分野：発達心理学

キーワード：コルチゾール反応 感情制御 縦断研究 親のしつけ 子どもの問題行動 子どもの気質

1. 研究開始当初の背景

「見守る」しつけは、日本の子育て、教育現場で広く取り入れられてきた。日本では親子間の非言語的コミュニケーションが多く (Fernald & Morikawa, 1993), 「子どもの自主的問題解決力を育てたい」「子ども同士の育ち合いを大切にしたい」という養育者や保育者の発達期待や教育観から、「見守る」ことを重視してきた (佐藤, 2001; Tobin, Hsueh, Karasawa, 2009; 東, 1994)。しかし「見守る」しつけと子どもの発達との関連について直接検証をした研究はあまり多くない。これは「見守る」しつけには、幼児の他者理解の発達を促進する要素である「母親の心的状況の会話数の多さ」(e.g., Dunn, Brown, Slomkowski, Tesla, & Youngblade, 1991) と「親のわかりやすい言語的はたらきかけ」(東山, 2011) が少ないため、子どもの発達に対する「見守る」しつけの効果の検証を難しくしている可能性がある。さらに、「見守る」しつけは、幼児期の子どもの他者理解との間に負の相関が示されている(風間・平林・唐澤・Tardif・Olson, 2013)。しかし、「見守る」しつけが日本の子育てに適さないと結論するのは拙速である。第1の問題として、子どもに話しかけたりせず指示もしない応答性の低いしつけは、欧米ではネガティブな方略として捉えられてきた(Baumrind, 1967; 1971)が、欧米の養育態度尺度を基にした質問紙では、日本の「見守る」しつけを適切に測定できない可能性をあげることができる。第2に、他者理解や社会性の発達がまだ十分でない幼児期に、「見守る」しつけの直接的効果を見出すことが困難である可能性が考えられる。そこで日本の養育者のポジティブな意図を反映した「見守る」しつけを含めた養育態度尺度を構成して、「見守る」しつけと幼児期以降の子どもの発達との関連を総合的に検討することが必要であると考えた。

養育者との関係性や養育環境は、感情制御の内分泌系ホルモンなど暗黙裡な生理的反応にも関連する(e.g., Kochanska, Askan, & Joy, 2007; Ahnert, Gunnar, Lamb, & Barthel, 2004)。そこで本研究では、子どもの心理的要因との関連だけでなく、生理指標との関連も検討する。養育者との関係性が悪くネガティブな養育環境にいる子どもは、日常のストレスを示すコルチゾール分泌量のサーカディアンリズムが乱れる(Smeekens, Riksen-Walraven, & van Bakel, 2007)だけでなく、感情制御場面でもコルチゾール分泌量が急激に増加し、生理的ストレス反応が大きくなる(e.g., Lisonbee, Mizu, Payne, & Granger, 2008)ことが示されているからである。さらに不適切な養育環境から保護され新しい養育者と良好な関係性を持つようになると、コルチゾール分泌量の値が正常値になり、養育環境の変化は生理的ストレス反応の変化をもたらすことが示されてきた(Dozier, Peloso, Lewis, Laurenceau, & Levine, 2008)。したがって「見守る」しつけの子どもの発達における意味を明らかにするために、幼児期から児童期までの子どもの発達について、「見守る」しつけと子どもの気質、認知能力、感情制御との関連について、ストレスのかかるチャレンジ課題を実施し行動指標と生理指標から検討する必要があると考えた。

2. 研究の目的

本研究は、幼児期から児童期までの子どもの発達について、子どもの気質や認知能力、チャレンジ課題におけるコルチゾール反応と実際の対処行動、子どもの問題行動、「見守る」しつけを含む養育態度との関連について縦断的に検討することを目的とした。幼児期の子どもは、他者理解などの認知能力はまだ十分に発達していないため、「見守る」しつけを用いる養育者の意図を理解することが難しい可能性がある。「見守る」しつけが幼児期の子どもの他者理解と負の関連があっても(風間ほか, 2013)、その後の児童期になると、養育者の意図を子どもが理解することで、「見守る」しつけが子どもにとってポジティブな意味をもつ可能性が考えられる。本研究では児童期の子どもを対象に、幼児に実施した研究と同一の枠組みで実験・調査を実施し、既に収集した幼児期の子どものデータ(e.g., 風間ほか, 2013; 風間, 2015,)と合わせて縦断的に検討することにより、「見守る」しつけの子どもの発達への効果を直接的に検証し、日本の子育ての意味を再考することとした。

3. 研究の方法

(1) 幼児期から児童期にかけての感情制御の発達

日本の子どもの感情制御の発達を検討するために、子どもとその養育者16組を対象に、チャレンジ課題におけるコルチゾール反応と実際の対処行動について、既に4歳時点で実施した課題と同一の実験・調査を11-12歳時点で行い縦断的検討を行った。さらに感情制御と関連する気質について、4歳・8歳・11-12歳時点の3時点について縦断的検討を行った。研究に参加した時期は、幼児期4歳4ヶ月(SD=4.4ヶ月)、児童期8歳5ヶ月(SD=5.7ヶ月)、11歳7ヶ月(SD=7.5ヶ月)である。

ストレスを経験したときの子どものコルチゾール反応と対処行動をみるために、チャレンジ課題としてコンピュータ課題(Tardif, 2008)を実施した。コンピュータ課題では、ゲームに負けるというネガティブ経験での対処行動とコルチゾール反応を測定する。最初に子どもがゲームのルールとコントローラーの使い方を覚える。実験者と一緒に行ったゲームの練習バージョンでは勝つ。次にゲームを一人でを行い、結果的に失敗する。1分間そのまま部屋に一人でいた後、実験者はプレイルームに戻り、子どもの感情を確認し、なぐさめる。その後別の実験者は、ゲームが壊れていて勝てないようになっていたことを告げる。実験者は子どもに謝罪しプレゼントを渡す。コンピュータ課題実施中の子どもの行動観察を行う。課題実施の前後に唾液を10分毎に8回採取し、課題実施10分後から50分後までのコルチゾール分泌増加量AUCi10-50を分析した(Fekedulegn et al., 2007)。

子どもの気質は、養育者に質問紙調査を行い、注意の焦点化、怒り・フラストレーション、抑制的制御、衝動性、知覚的敏感さを分析した。既に収集した4歳時のデータでは、Child Behavior Questionnaire (CBQ; Rothbart ほか, 1989, Kusanagi, 1993)を8歳と12歳では、The Temperament in Middle Childhood Questionnaire (TMCQ; Simons & Rothbart, 2004)を用いた。

(2) 幼児期における養育者のしつけ方略、幼児期の気質、コルチゾール反応と子どもの問題行動

との関連

児童期後期 11-12 歳の子どもの問題行動と関連する要因として、幼児期の気質、コルチゾール反応について縦断的に検討した研究はあまり多くない。本研究では、児童期後期（11 - 12 歳）の問題行動と関連する要因を検討するために、収集済みのデータである 4 歳時点の気質とチャレンジ課題におけるコルチゾール反応、養育者のしつけ方略との関連を分析した。

研究対象者は、都内の子どもとその養育者 27 組（幼児期: 4 歳 4 ヶ月, SD=4.4 ヶ月, 児童期中期: 8 歳 5 ヶ月, SD=5.7 ヶ月, 児童期後期: 11 歳 7 ヶ月, SD=7.5 ヶ月）子どもの問題行動は、養育者に Child Behavior Checklist の質問紙調査を実施した。幼児期は CBCL/2-5 (Achenbach, 1997), 児童期は CBCL/4-18 (Achenbach, 1991) を用い、攻撃行動と内在化問題行動を分析した。幼児期の子どもの気質は、養育者に Children's Behavior Questionnaire (Rothbart et al., 1989, 2001; Kusanagi, 1993) を実施して収集したデータから、怒り・欲求不満、接近・期待、注意の焦点化、注意のシフティング、なだまりやすさ、衝動性、抑制的制御、知覚過敏、微笑について分析した。養育者のしつけは、愛情のない態度、子どもの人柄について悪く言う態度、見守るしつけ、養育者の気持ちに誘導するしつけを分析した。さらに幼児期に対人的チャレンジ課題 (Cole, 1986) を実施し、唾液を採取して、課題実施 10 分後から 50 分後までのコルチゾール分泌増加量 (AUCi10-50) を算出したデータを用いて分析した。

4. 研究成果

(1) 幼児期から児童期にかけての感情制御の発達

コンピュータゲーム失敗後の 4 歳（収集済みのデータ）と 11-12 歳のコルチゾール分泌増加量 (AUCi10-50) の変化をみると、2 名を除いて 12 歳ではコルチゾール分泌増加量が示されず、4 歳に比べて減じていることが示された。さらにコンピュータゲーム失敗後の子どもの行動については、4 歳では立ち上がる/動き回る (7 名)、泣く (7 名) が示されていた (風間ほか, 2016) が、12 歳では、ゲームに負けそうになっているとき集中して必至にコントローラを操作している操作が見受けられたが、ゲームに負けると、周りを見たり (全員)、独り言を言ったり (4 名)、ため息をつく (3 名) などは見られたものの、泣いたり立ち上がったたりする子どもはいなかった。

次に、4 歳・8 歳・12 歳時点での気質の変化について 1 要因分散分析を行った (Figure 1)。その結果、Attention focusing ($F(2,44)=5.684, p<.01$) と Anger Frustration ($F(2,44)=7.098, p<.01$) は有意な差があり、年齢が高くなれば注意の焦点化が高くなり、怒り・フラストレーションは低くなることが示された。抑制的制御、衝動性、知覚的敏感さについては有意な差が示されなかった。

4 歳時点では、コルチゾール反応が示され、泣いたり立ち上がったたり、その場から逃げ出すなどの行動が見られたが、今回の縦断的分析により 11-12 歳時点では、コルチゾール反応が示されず、泣いたり立ち上がるような行動は見られなかった。11-12 歳時点では、「ゲームに負ける」などでは、足を動かしたりなどのイライラした様子は示されるが、「椅子に座っている」という実験者の指示を守ることができており、児童期になると感情制御は発達して、自分の行動を統制することができるようになったと考えられる。さらに、気質の変化として、注意の焦点化は高くなるが、怒り・フラストレーションは低くなることが示され、感情制御の発達を促進する要因になっていると示唆される。

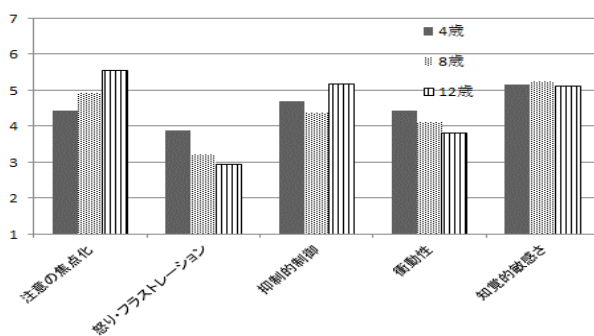


Figure 1 4 歳・8 歳・12 歳時点の子どもの気質

(2) 幼児期における養育者のしつけ、幼児期の気質、コルチゾール反応と児童期の 11-12 歳時点の子どもの問題行動との関連

幼児期の気質と各時点の子どもの攻撃行動及び内在化問題行動との間の相関係数を算出した (Table 1)。4 歳のときの気質の微笑と笑いが高いほど 11 - 12 歳のときの内在化問題行動の得点が低い傾向が示された ($r=-.356, p<.10$)。

幼児期の養育者のしつけ方略、コルチゾール反応と各時点の子どもの攻撃行動及び内在化問題行動との間の相関係数を算出した (Table 2)。4 歳の対人的チャレンジ課題におけるコルチゾール分泌増加量が多いほど 11 - 12 歳の攻撃行動の得点が高く ($r=.571, p<.01$)、内在化問題行動の得点も高い ($r=.441, p<.01$) ことが示された。さらに 4 歳のときの養育者のネガティブなしつけが高いほど 11 - 12 歳時点の攻撃行動の得点が高い傾向 (愛情のない態度 $r=.366, p<.10$, 人柄を悪く言う $r=.398, p<.05$) が示された。

幼児期の対人的ストレスを経験した時のコルチゾール反応の高さは、その後の子どもの問題行動得点の高さと関連すること、幼児期の養育者のネガティブな養育態度の多さは、その後の子どもの問題行動得点の高さと関連することが示された。一方「見守る」しつけは、子どもの問題行動との関連が示されなかった。

Table1 4歳のときの気質とその後の子どもの問題行動との間の相関係数

	怒り・欲求 不満	接近・期待	注意の焦 点化	注意の移 行	なだまりやすさ	衝動性	抑制的制御	知覚的敏 感さ	微笑と笑 い
11-12歳 攻撃行動	.092	.126	-.144	-.039	-.158	-.036	.109	-.133	-.183
8歳 攻撃行動	.045	.181	-.446*	-.185	-.147	.209	.022	-.198	-.096
4歳 攻撃行動	.314	.474*	-.244	-.589**	-.466*	.121	-.514**	-.254	-.254
11-12歳 内在化問題行動	.012	-.202	.040	.124	-.143	-.266	.201	.031	-.356+
8歳 内在化問題行動	.232	.040	-.029	-.184	-.341	-.193	.052	-.081	-.416*
4歳 内在化問題行動	.501**	.315	-.112	-.497**	-.572**	-.277	-.086	.027	-.271

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

Table2 4歳のときのコルチゾール反応、養育者のしつけとその後の子どもの問題行動との間の相関係数

	AUC ₁₀₋₅₀	愛情のない 態度	人柄を悪く 言う	見守るしつ け	養育者の気持 ちに誘導
11-12歳 攻撃行動	.571**	.366+	.398*	-.115	.221
8歳 攻撃行動	.377+	.513*	.411+	-.062	.059
4歳 攻撃行動	.353+	.158	.141	.023	.043
11-12歳 内在化問題行動	.441*	.009	-.268	-.030	.225
8歳 内在化問題行動	.620**	.299	-.237	.199	.108
4歳 内在化問題行動	.383+	.032	.060	.025	.128

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計6件)

風間みどり・平林秀美・井澤修平・唐澤真弓, 子どもの感情制御の発達 幼児期から児童期までの縦断的研究, 日本発達心理学会第30回大会, 2019年3月.

Midori Kazama・Hidemi Hirabayashi・Mayumi Karasawa・Twila Tardif・Sheryl Olson・Li Wang, Cultural diversity of physiological and psychological responses in emotion regulation among preschoolers in three cultures, The Society for Research in Child Development Biennial Meeting 2019 Baltimore, in March, 2019.

風間みどり・平林秀美・唐澤真弓, 子どもの問題行動と関連する要因 幼児期から児童期後期までの縦断研究からの検討, 日本心理学会第82回大会, 2018年9月.

風間みどり・平林秀美・唐澤真弓・Twila Tardif・Sheryl Olson・Li Wang, 幼児期の子どもの外在化問題行動・内在化問題行動の予測因 日本・中国・アメリカの子どもについての文化比較研究, 日本発達心理学会第29回大会, 2018年3月.

風間みどり・平林秀美・唐澤真弓, 児童期の内在化問題行動の予測因 幼児期の生理的ストレス反応と親のしつけの縦断的データによる検討, 日本社会心理学会第58回大会, 2017年10月.

風間みどり・平林秀美・唐澤真弓, 見守るしつけと子どもの感情制御 縦断研究からの検討, 日本教育心理学会第59回大会, 2017年10月.

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別：
取得状況（計0件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者 なし

(2)研究協力者

平林秀美（HIRABAYASHI HIDEMI）東京女子大学・現代教養学部・准教授

唐澤真弓（KARASAWA MAYUMI）東京女子大学・現代教養学部・教授

井澤修平（IZAWA SHUHEI）独立行政法人労働者健康安全機構労働安全総合研究所・産業ストレス研究グループ・上席研究員